

子どもの行動実現に対する 親の発達期待と叱る行為の影響

森下正修*・本島優子**

本研究では、親が子どもについて日常的に抱いている発達への期待と、子どもに対する叱る行為、および子どもの行動実現の三者の関係について検討した。設定された7領域の行動のすべてにおいて、当該行動についての親の発達期待が高いほど子どもの行動実現も進んでいることが明らかとなった。ただし、親の発達期待の高さは叱る行為の増加には必ずしもつながらないこと、また叱る行為の持つ行動実現への効果はほぼ認められないかもしくは負の影響を及ぼすことが示された。こうした結果から、親が子どもに対して抱いている素朴な発達期待は、ある行動ができないことを叱るという行為を媒介せずに、他の何らかの意識的・無意識的な方法を通じて、子どもの行動の獲得を促進させることがわかった。

1. 問題と目的

ほぼすべての親は、子どもについて何らかの考えをもっていると思われる。例えば、子どもとはこういうものであるとか、子どもはこのように発達していく、子育てはこのようにしたらよいといった素朴な考えを抱きながら日常子どもに接していることであろう。このような親の信念・考え・知識・理論・スキーマなどに関しては、素朴心理学や社会的認知研究の興隆とともに、1980年代頃から盛んに研究が行われるようになってきている。そ

うした研究の中で、親は子どもに対し、その性質や発達のあり方、育児やしつけの方法などについて実に様々な考えや信念を抱いていることが明らかにされている（レビュー論文として、Goodnow, 1984; Hirsjarvi & Perala-Littunen, 2001; McGillicuddy-DeLisi & Sigel, 1995; Miller, 1988; Murphey, 1992; Okagaki & Divecha, 1993; Sigel & McGillicuddy-DeLisi, 2003）。

本研究では、こうした親の持つ考え・信念のなかでも、とくに「発達期待（developmental expectation）」について取り上げる。発達期待とは、子どもの様々な行動や能力の発達に関して親が抱く期待のことをいう。これまでの研究では、「（乳児が）言葉を理解する」「（乳児が）ものを見る」（Pomerleau,

*もりしたまさなお（京都府立大学福祉社会学部講師）

**もとしまゆうこ（京都大学大学院教育学研究科博士前期課程院生）

Malcuit, & Sabatier, 1991)、「階段を上り下りできる」「自分で着替える」「自分の名前が書ける」(Willemsen & van de Vijver, 1997)、「やたらに泣かない」「友達の気持ちに思いやりをもつ」「質問されたらきはき答える」(柏木・東, 1977)などの発達課題項目が取り上げられ、子どもが何歳くらいにできると思う、もしくはできて欲しいと思う、という期待を親が抱いていることについて調べられている。

このような親の発達期待を扱った研究は、2つの流れに大別することができる。1つは、親の発達期待の形成要因を明らかにすることを目的とした研究である。この種の研究では一般に、異なる特質をもったグループにおける発達期待を比較することで、その期待の形成に寄与している要因を分析・特定化するという手法が用いられる。例えば、父親と母親の比較 (Kliman & Vukelich, 1985) や、親の学歴・収入・職業など異なる社会経済階層の比較 (Ninio, 1979; Palacios, 1990)、若い母親と熟年の母親の比較 (Vukelich & Kliman, 1985)、異文化間比較 (柏木・東, 1977; Goodnow, Cashmore, Cotton, & Knight, 1984; Joshi & MacLean, 1997; Keller, Miranda, & Gauda, 1984; Pomerleau, et al., 1991; Willemsen & van de Vijver, 1997) などがこれまで行なわれている。こうした比較の中では、とくに文化差の影響が顕著であることから、発達期待の形成に文化的要因が深く関与していることが推測される。

もうひとつの流れは、親の発達期待と親の行動あるいは子どもの発達側面 (child development / outcomes) との関係性を扱った研究である。これは親の抱いている発達期待が子どもに対する実際の行動にどのように影響するか、あるいは親の発達期待と子どもの発達

がどのような関連を有するかを明らかにする目的のものである。これまでのところ、母親の発達期待と子どもへの教授スタイルや子どもの知的発達との関係 (東・柏木・ヘス, 1981)、あるいは母親の発達期待と子どもの自己制御機能との関係 (柏木, 1988) について研究が行なわれている。

以上のように、親の発達期待に関する研究は大きく2つの流れに分けることができるが、これまでの研究の多くは前者の発達期待の形成要因に関するものであり、後者の親の行動との関連、あるいは子どもの発達側面との関連について調べた研究は比較的少ないといえる。とくに、「親の発達期待—親の行動—子どもの発達」の三者の関係を包括的に検討した実証的研究はほとんどない。しかし現実の子育てにおいては、多くの親が子どもに何らかの発達期待を抱き、その期待によって意識的・無意識的を問わず、子どもへの働きかけや行動を変化させているはずである。また同時に、そうした期待やそれに発する行動が子どものスキルや能力の習得を左右していることも十分にあり得る。したがって、この三者の関係について包括的に検討することは、子どもの発達に影響する要因を探求することにとどまらず、現実の子育てにおける心がけや注意事項を示唆するという点でも非常に意義があるものと思われる。

本研究の目的は、この「親の発達期待—親の行動—子どもの発達」の三者の関係について包括的検討を行なうことである。具体的には、親の発達期待については柏木・東 (1977) の *Developmental Expectations Questionnaire* に基づき、「礼儀」や「自立」など、子どものさまざまな行動面に対して親がどの程度の発達期待をもっているかを測定する。また、そうした子どもの行動に関連して親がど

の程度「叱る」という行為をとるか、および子どもが各行動をどの程度きちんととることができるかを併せて調査し、それぞれの間の関連性について検討する。ここで親の行動として「叱る」行為を取り上げたのは、子どもに望ましい行為を形成させるためのもっとも日常的なしつけ方略の一つとして多くの親が行なっていると考えられたからである。叱るという行為は「親が何に価値を置き、何に価値を置いていないかを子どもに示す行為」(沢崎, 1995, p97)とされ、子どもに望ましい行為を形成させる代表的な手段と考えられる。そのような手段としては他に「ほめる」行為も考えられるが、日本人はほめることがあまり上手ではないとされる(数井, 1999; 桜井, 1995)。また、「親子の意識調査」(グループダイナミックス研究所, 1985)によれば、日本の親は日常的に子どもをほめることよりも叱ることが圧倒的に多いことが明らかにされている。こうしたことから、日本の親にとっては叱る行為の方がより一般的なしつけ方略であると推測されたため、本研究の調査対象とした。

この調査によって、日本の親が子どものどのような行動の早期発達を期待しているか、子どものどのような行動に関連して叱るか、子どもはどのような行動を達成しているか、という程度を知ることができる。また、それをもとにして「親の発達期待—親の叱る行為—子どもの行動実現」の三者の相互作用についても検討することが可能である。この三者の関係については、以下のように想定することができる。

親の発達期待と親の叱る頻度については、親が早くに身につけて欲しいと期待している行動であれば、それがうまくできなかつたり失敗してしまつたりしたときには叱ることが

多くなると考えられる。したがって、「早期の発達を期待するほど、叱る頻度も多い」(仮説1)と予想される。

親の叱る頻度と子どもの行動実現については、ある行動について叱る頻度が多いほど親の価値をより明確に子どもに呈示していることになり、子どもはそのような親の価値を取り入れて当該行動を早く獲得していくものと考えられる。それゆえ、「親の叱る頻度が多いほど、子どもの行動実現も進んでいる」(仮説2)と予想される。

親の発達期待と子どもの行動実現については、早く行動を身につけて欲しいという親の期待や願いは何らかのかたちで子どもへの働きかけとなって現れ、それが子ども側にも受け入れられ行動発達が促進されるものと考えられる。先行研究においても、親が早期発達の期待を抱くことは概して子どもの発達を促進する要因となることが明らかにされている(東他, 1981)。したがって、「親の発達期待が早いほど、子どもの行動実現も進んでいる」(仮説3)との結果が得られると予想される。

2. 方法

調査対象 富山県黒部市の市立保育所8園***の年中児の親209名のうち、有効回答が得られた140名(回答率67.0%)を対象とした。性別の内訳は男児76名、女児63名、不明1名であり、平均年齢は5.0歳であった。

調査時期と手続き 2003年9月上旬に一斉に各保育所を通して親に質問紙を配布し、1週間以内に園に設置したアンケート回収箱に提出するよう求めた。

質問紙

(a)子どもの属性: 子どもの年齢 (○才○ヶ月)

表1 各行動領域における親の発達期待

	全体 N=140		男児 N=76		女児 N=63	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
学校関係スキル	1.31	0.35	1.30	0.34	1.29	0.35
従順	1.98	0.44	1.99	0.45	1.95	0.42
礼儀	2.21	0.45	2.19	0.42	2.22	0.40
情緒的成熟	2.08	0.47	2.08	0.48	2.07	0.46
自立	1.78	0.28	1.77	0.30	1.78	0.26
社会的スキル	1.86	0.34	1.85	0.36	1.86	0.36
言語による自己主張	1.68	0.38	1.67	0.38	1.68	0.38
全体	1.84	0.25	1.83	0.26	1.83	0.24

※性別不明1名

月)と性別について回答を求めた。

(b)親の発達期待: Developmental Expectations Questionnaire (柏木・東, 1977)における行動項目41個の中から、就学前後の子どもにおける7領域の発達課題に当てはまる34項目を選択した。残りの7項目は今回の調査では使用しなかった。7領域に含まれる項目数の内訳は、「学校関係スキル(例: 興味のあることを図鑑や事典で調べる)」3項目、「従順(例: いいつけられた仕事は、すぐにする)」5項目、「礼儀(例: 朝、家族に“おはよう”とあいさつする)」3項目、「情緒的成熟(例: いつまでも怒っていないで、自分で機嫌を直す)」4項目、「自立(例: 大人に手伝ってもらわずに一人で食事ができる)」8項目、「社会的スキル(例: 友達の気持ちに思いやりをもつ)」6項目、「言語による自己主張(例: 意見や希望をきかれたら、はっきり述べる)」5項目となっていた。各項目に関して、何才頃にできて欲しいと思うかを「a: 4才になるまでに」「b: 4・5才頃」「c: 6才になるまでに」の3件法で回答を求めた。各項目は領域に関係なくランダムな順序で並べた。

(c)親の子どもに対する叱る行為: (b)の質問で用いた34行動項目に対して、どの程度普段叱るもしくは過去に叱ったことがあるかを、

「a: よく叱る/叱った」「b: たまに叱る/叱った」「c: ほとんど叱らない/叱らなかった」の3件法で回答するように求めた。各項目は領域に関係なくランダムな順序で並べた。

(d)子どもの行動実現: (b)(c)の質問で用いたのと同じ34項目の行動が、普段どの程度実際に子どもに見受けられるかについて、「a: よくある」「b: たまにある」「c: ほとんどない」の3件法で回答を求めた。各項目は領域に関係なくランダムな順序で並べた。

3. 結果と考察

(1) 親の発達期待

34行動項目すべての回答に対して、「a: 4才になるまでに」を3点、「b: 4・5才頃」を2点、「c: 6才になるまでに」を1点として得点化し、領域別および領域全体の平均値を求めた(表1)。各領域の平均値を従属変数として、領域の要因の効果を調べる1要因7水準の分散分析を行なった結果、領域の主効果が有意であった($F(6,834) = 128.62, p < .01$)。続いてLSD法による多重比較を行なったところ、「自立」と「社会的スキル」間以外の各領域間に5%水準で有意な

差が認められた。このことから、子どもの行動の中でも「礼儀」「情緒的成熟」「従順」に対する親の発達期待が他に比べて高いこと、反対に「言語による自己主張」「学校関係スキル」に対する期待は低いことがわかる。親は子どもに対して、丁寧に話すことや挨拶をきちんとすること、また機嫌や情緒を自分でコントロールできること、いわれたら言うことを聞き従うことなどを早くに達成して欲しいと期待している一方で、本や時計や図鑑などを使いこなしたり、自分の意見や希望をきちんと表明したりすることに関してはそれよりも後で達成されるので構わないと考えていることが明らかとなった。なお、子どもの性別による親の発達期待の違いはとくにみられなかった。

各領域の発達期待の高さの順に関しては、今回の調査結果と先行研究の結果はほぼ合致していた。日本の親や保育者の発達期待を扱った先行研究としては、満5才の母親を対象とした日米比較研究（柏木・東, 1977）や、3～6才までの園児の母親を対象とした研究（柏木, 1988）、幼稚園の教師を対象とした研究（野村・目良・田矢・柏木, 1999）が挙げられる。各研究によって調査時や調査対象は異なるが、親や保育者が子どもにどのような行動から先に身に付けて欲しいと期待しているかは、「礼儀」が最も早く、次いで「情緒的成熟」「従順」となっているという一貫した特徴が見受けられており、これは今回の結果でも同様であった。最初に行われた1977年の研究から20年以上が経過しており、調査対象となる子どもの年齢もある程度異なっているにも関わらず、発達期待の高さの順が変わらずに一貫していることから、子どもに礼儀や情緒や従順さを早期に身につけて欲しいと期待することは、日本の親や保育者に広くみ

られる一般的かつ根強い特徴であることが推測される。

また、柏木・東（1977）は母親の発達期待を日米で比較し、米国の母親が日本の母親と対照的な発達期待を抱いていることを指摘している。すなわち、米国の母親は自分の意見や希望をはっきりと表明する「言語による自己主張」や思いやりやリーダーシップをもち仲間との関係をこなす「社会的スキル」への期待を高く抱いているが、日本の母親にはそういった傾向は認められないという。今回の調査結果でも、「言語による自己主張」に対する親の期待は低かった。このような発達期待にみられる日米差は「日本ではいうことを聞く温和な子が、米国では、他者に対して自己を主張し、対等に時にはわたりあってゆける子が、それぞれ“よい子”とされている」（柏木, 1979）という文化的背景の違いを反映しており、ひいてはそれぞれの社会・文化で重視されている価値や特質が異なることを意味すると思われる。日本は様々な面で欧米化が進んでいるといわれるものの、日本人的な価値観や思考様式もまた根強く残っているように感じられる。世代の移り変わりや異文化の影響があっても、そうした日本的な心理的特質が維持される背景には、子育てにおける親から子への価値の伝達という要因がある可能性を、一連の発達期待研究は示しているといえる。

（2）親の叱る頻度

発達期待と同様に、34行動項目すべての回答に対して、「a：よく叱る／叱った」を3点、「b：たまに叱る／叱った」を2点、「c：ほとんど叱らない／叱らなかった」を1点として得点化し、領域別および領域全体の平均値を求めた（表2）。各領域の平均値を従属変

表2 各行動領域における親の叱る頻度

	全体 N=140		男児 N=76		女児 N=63	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
学校関係スキル	1.03	0.11	1.04	0.12	1.03	0.10
従順	2.37	0.46	2.40	0.45	2.33	0.44
礼儀	2.14	0.48	2.11	0.44	2.15	0.52
情緒的成熟	1.84	0.44	1.81	0.43	1.88	0.43
自立	1.38	0.27	1.36	0.26	1.39	0.29
社会的スキル	1.78	0.37	1.78	0.37	1.78	0.345
言語による自己主張	1.58	0.41	1.56	0.42	1.59	0.40
全体	1.72	0.27	1.71	0.26	1.71	0.27

※性別不明1名

数として、領域の要因の効果を調べる1要因7水準の分散分析を行なった結果、領域の主効果が有意であった ($F(6,834) = 330.42, p < .01$)。続いてLSD法による多重比較を行なったところ、「情緒的成熟」と「社会的スキル」の間以外の各領域間に5%水準で有意な差が認められた。親の叱る頻度は「従順」「礼儀」において高く、反対に「学校関係スキル」「自立」「言語による自己主張」では低かったといえる。親は子どもが言うことを聞かなかつたり、行儀の悪いことをしたり、いつまでも泣いていて自分で機嫌を直せなかつたりする行動に対して頻繁に叱る(叱った)が、生活自立が不十分であったり、本や時計が使いこなせなくても叱る(叱った)ことは少ないということが明らかとなった。なお、子どもの性別による親の叱る頻度の違いはとくにみられなかった。

(3) 子どもの行動実現

「a:よくある」を3点、「b:たまにある」を2点、「c:ほとんどない」を1点として、また逆転項目に関しては、「a:よくある」を1点、「b:たまにある」を2点、「c:ほとんどない」を3点として、領域別および領域全体の平均値を求めた(表3)。各領域の平均値を従属変数として、領域の要因の効果

を調べる1要因7水準の分散分析を行なった結果、領域の主効果が有意であった ($F(6,834) = 103.37, p < .01$)。続いてLSD法による多重比較を行なったところ、「従順」「社会的スキル」「自己主張」の各領域間と、「礼儀」「情緒的成熟」間には有意な差が認められなかったが、その他の組み合わせにおいては5%水準で有意な差が認められた。「学校関係スキル」の実現度が他に比べて低いほかは、子どもの行動の実現度は各領域でどれも同程度であり、挨拶や行儀をきちんとする「礼儀」や自分で機嫌や情緒をコントロールできる「情緒的成熟」が他よりも若干よく達成されているということが示されたといえる。

また、性別による子どもの行動実現の違いは、「従順」においてのみ性差がみられ ($t(137) = 1.68, p < .05$)、男児よりも女児が「従順」に関わる行動をよく達成していた。女児にみられるこのような特徴は、自己制御機能の「自己抑制」次元の行動に一貫した性差(女児>男児)が認められるという知見(柏木, 1988)とも一致すると考えられる。すなわち、日本では他者への協調や調和が女性により強く求められている(柏木, 1997)ために、女児がこれに類する「従順」な行動を早期に獲得しているのであろう。ただ、先の発達期待や叱る頻度についての分析では

表3 各行動領域における子どもの行動実現

	全体 N=140		男児 N=76		女児 N=63	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
学校関係スキル	1.46	0.47	1.47	0.45	1.44	0.47
従順	2.16	0.35	2.11	0.35	2.21	0.32*
礼儀	2.24	0.41	2.22	0.41	2.31	0.41
情緒的成熟	2.26	0.39	2.27	0.38	2.21	0.40
自立	2.01	0.32	2.02	0.33	2.03	0.29
社会的スキル	2.15	0.35	2.17	0.37	2.14	0.31
言語による自己主張	2.15	0.46	2.13	0.44	2.16	0.49
全体	2.08	0.26	2.07	0.25	2.09	0.26

* $p < .05$: 男児—女児間において有意な差が認められた

※性別不明1名

「従順」に性差が認められなかったため、この行動の早期獲得を促した要因が何であるのかについては、ここまでの分析では説明することができない。この点についての考察は以下の(4)において詳述する。

(4) 「親の発達期待—親の叱る行為—子どもの行動実現」の三者の関係

「親の発達期待—親の叱る行為—子どもの行動実現」の三者の関係において、とくに発達期待と叱る行為が行動実現にどのような影響を及ぼしているかを調べるため、行動領域ごとにパス解析を行なった(図1)。三者間のパスは、仮説1～3に基づいて設定された。

その結果、7領域すべてにおいて、親の発達期待が子どもの行動発達を促すという正の影響が認められた。「親が早期の期待を抱くほど、子どもの行動実現も進んでいる」という仮説3は、すべての行動を通じて認められたといえる。この結果は、母親の発達期待の早さと子どもの発達を関連付けた東他(1981)と一致しており、母親が子どもの発達に対して期待を抱くことによって子どもの行動実現が促進されるということが改めて確認されたといえよう。

しかし、親の発達期待が高いからといって、

子どもを叱る行為には必ずしも結びつかないことが、発達期待と叱る行為の間のパス係数によって示された。「学校関係スキル」「礼儀」「従順」の3領域においては、親の期待が叱る頻度に正の影響を与えており、親が早期の期待を抱くほど叱る行為となって現れやすいことが示されたが、他の4領域についてはそのような影響は認められなかった。したがって、「早期の発達を期待するほど、叱る頻度も多い」との仮説1は一部の行動領域でのみ成立することがわかった。

また、叱る行為が行動実現に与える影響については、「親の叱る頻度が多いほど、子どもの行動実現も進んでいる」という仮説2に完全に反する結果となった。叱る行為が行動実現に有意な影響を与えていたのは「従順」と「情緒的成熟」の2領域のみであり、しかも当初の予想とは反対に、親の叱る行為が子どもの行動発達に負の影響を与えていることが明らかとなった。すなわち、叱る頻度が高いほど、その行動の実現を妨げていることが示されたのである。

これらのことから、親の期待と子どもの発達を媒介する親の行動として推測された叱る行為は、そういった効果をもたらさないばかりか、否定的影響を及ぼす場合があるといえ

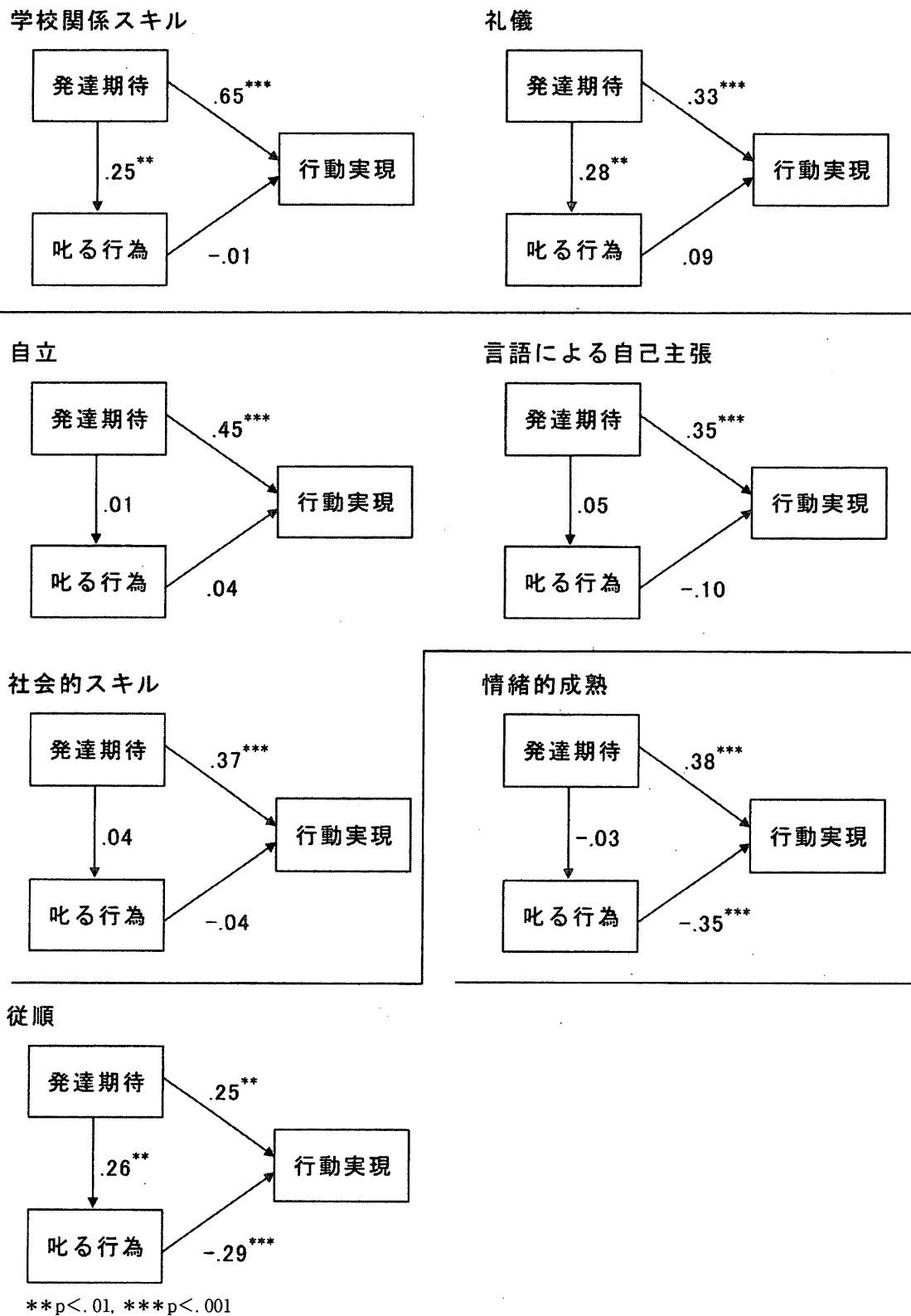


図1 「親の発達期待—親の叱る行為—子どもの行動実現」のパス図モデル間に引かれた線は、有意なパス係数が認められた箇所が同じであったもの同士の区分を表す。

る。本来、叱るという行為は子どもの望ましくない行動を禁止するためのものではあるが、その一方で、子どもに「欲求不満を喚起し、不安や緊張などの有害感情をもたらす」(高野, 1995, p 17)、「反発的な態度が形成される」(菊地, 1995, p 62)などの否定的効果も内包することが指摘されている。今回の調査結果において「従順」と「情緒的成熟」に否定的影響がみられたのも、親が頻繁に叱ることがかえって子どもの不満や不安を喚起し、従順さや情緒的安定を損なわせる可能性があるためと考えられる。親から叱られることで子どもは「緊張とせつなさを味わ」(川合, 1998, p 41)ったり、「欲求不満という、心に緊張が生ずる状態」(小林, 1997, p 7)に陥ったりし、そのことが親への反発や情緒面での未成熟を引き起こすのだと考えられる。このように、親にとっての「叱る」意味のみならず、子どもにとっての「叱られる」意味をも考慮するならば、親が子どもの行動を叱ることは常に肯定的な効果をもたらすわけではなく、とくに子どもの情緒面の発達に対しては否定的な影響を及ぼす可能性もあることが説明できるだろう。

さらに、今回の結果は、親の発達期待と子どもの行動実現を媒介する要素として、本研究で取り上げた叱る行為以外のものを想定しなければならないということを示唆している。一般に、発達期待といった親の考えや信念がどのように実際行動として現れるかは極めて複雑であり(柏木, 1988)、さらにそれらが子どもに対して具体的に及ぼす効果もまた非常に多様であると考えられる。上述したほめという行為や、あるいは潜在的な期待が行動の実現を促すピグマリオン効果の存在など、この点に関しては今後さらに詳細に検討していくことが必要であろう。

(5) まとめ

以上を総括すると、「親の発達期待—叱る行為—子どもの行動実現」の関係については、①領域全般的に親の早期の発達期待が子どもの行動実現を促す効果をもつこと、また②一部の領域では、親の早期の発達期待が叱る頻度の多さに影響を与えること、しかし③叱る頻度の多さはかえって子どもの行動実現に否定的影響を及ぼす場合があること、の3点が示されたと言える。

本研究では「親から子へ」という方向の因果関係を題材に進めてきたが、逆に「子から親へ」という方向の因果関係が存在する可能性も考えられる。例えば、子どもの行動実現が進んでいるからこそ親が早期の発達期待を抱く、また、子どもの行動がよくできていないからこそ親は頻繁に叱るなど別の説明の可能性がありうる。今回のパス解析ははじめに設定した仮説に基づいてモデルを構成したが、このような因果関係を検討するにあたっては、逆の方向性を考慮したモデルとの比較などが必要になるであろう。

さらに、本研究のデータはすべて質問紙調査によって収集しており、親の行動側面も子どもの発達側面もすべて親自身による主観的報告に依存している。今後、観察や第三者による評定などをもとにした、より客観的な指標による検討が必要だろう。また、親の発達期待が具体的にどのような行動となって子どもの行動発達を促進しているのかについて、実際の親子の相互作用場面を調べることなどで詳細に追究することも今後の課題である。

現実の子育てにおいても、親は子どもに様々な期待をかけることであろう。その功罪を論じることは本研究の範疇ではないが、少なくとも子どもの行動を実現させるという点

において、親の期待には一定の意味があるといえる。また、本研究では、叱るという行為は子どもの行動実現を促進することはなく、むしろ情緒面に悪影響を及ぼすことが示唆された。親の抱く期待が叱る行為へと直に結びつくわけではないにせよ、子どもをつい叱りたくなるような場合などには、その行為が子どもにとってどういった効果をもつのかについて、親は注意深く考えねばならないといえるだろう。****

<注>

*** 本調査においては石田保育所、生地東部保育所、大布施保育所、田家保育所、三島保育所、三日市保育所、村椿保育所、若栗保育所にご協力いただいた。記してお礼申し上げます。

**** 本論文は、第二著者・本島優子の卒業論文をもとに加筆・修正したものである。

<引用文献>

- 東洋・柏木恵子・R.D.ヘス 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達 東京大学出版会
- Goodnow, J.J. 1984 Parents' ideas about parenting and development: A review of issues and recent work. *Advances in developmental psychology*, 3, 193-242. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Goodnow, J.J., Cashmore, J., Cotton, S., & Knight, R. 1984 Mothers' developmental timetables in two cultural groups. *International Journal of Psychology*, 19, 193-205.
- グループダイナミックス研究所 1985 親子の意識調査
- Hirsjarvi, S., & Perala-Littunen, S. 2001 parental beliefs and their role in child-rearing. *European Journal of Psychology of Education*, 1, 87-116.
- Joshi, M.S., & MacLean, M. 1997 Maternal expectations of child development in India, Japan, and England. *Journal of Cross-cultural Psychology*, 28, 219-234.
- 柏木恵子 1979 社会的学習としての発達の文化差とその要因 心理学評論, 22, 278-294.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- 柏木恵子 1997 行動と感情の自己制御機能の発達—育児文化との関連で 柏木恵子・北山忍・東洋(編著)文化心理学—理論と実証 東京大学出版会 Pp. 180-197.
- 柏木恵子・東洋 1977 日米の母親における幼児への発達期待及び就学前教育観 教育心理学研究, 25, 34-45.
- 川合貞子 1998 発達段階に見合う叱り方 児童心理, 52, 41-46.
- 数井みゆき 1999 しつけとしての「叱る」と「ほめる」 児童心理, 53, 39-46.
- Keller, H., Miranda, D., & Gauda, G. 1984 The naive theory of the infant and some maternal attitudes. *Journal of Cross-cultural Psychology*, 15, 165-179.
- 菊池武剋 1995 教師が与える罰を考える 児童心理, 49, 60-64.
- Kliman, D.S., & Vukelich, C. 1985 Mothers and fathers: Expectations for infants. *Family Relations*, 34, 305-313.
- 小林芳郎 1997 心にひびく叱り方・ほめ方—「叱る」「ほめる」の心理学 児童心理, 51, 2-12.
- McGillicuddy-DeLisi, A. V., & Sigel, I. E. 1995 parental beliefs. In M. H. Bornstein(Ed.), *Handbook of parenting: Vol. 3: Status and social conditions of parenting*, Pp.333-358. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Miller, S.A. 1988 Parents' beliefs about children's cognitive development. *Child Development*, 59, 259-285.
- Murphey, D. A. 1992 Constructing the child:

- relation between parents' beliefs and child outcomes. *Developmental review*, 12, 199-322.
- Ninio, A. 1979 the naive theory of the infant and other maternal attitudes in two subgroup in Israel. *Child Development*, 50, 976-980.
- 野村房代・目良秋子・田矢幸江・柏木恵子 1999 園・教師のしつけ観と幼児の自己制御機能 発達研究, 14, 37-52.
- Okagaki, L., & Divecha, D. J. 1993 Development of parental beliefs. In T. Luster & L. Okagaki (Eds.), *Parenting: An ecological perspective*, Pp.35-67. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Palacios, J. 1990 Parents' ideas about the development and education of their children. Answers some questions. *International Journal of Behavioral Development*, 13, 137-155.
- Pomerleau, A., Malcuit, G., & Sabatier, C. 1991 Child-rearing practices and parental beliefs in three cultural groups of Montreal: Quebecois, Vietnamese, Haitian. In M.H. Bornstein (Ed.), *Cultural approach to parenting*, 45-68. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates Inc.
- 桜井茂男 1995 ほめること・しかることの心理学 児童心理, 49, 9-14.
- 沢崎達矢 1995 親にしかできないほめ方叱り方 児童心理, 49, 96-100.
- Sigel, I. E., McGillicuddy-DeLisi, A. V., & Godonow, J. J. 1992 *Parental belief systems*.
- Sigel, I. E & McGillicuddy-De Lisi, A. V. 2002 Parent beliefs are cognitions: The dynamic belief systems model. In M. H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting: Vol. 3: Being and becoming a parent (2nd ed.)*, Pp. 485-508. Mahwah, NJ, US: Lawrence Erlbaum Associates.
- 高野清純 1995 「しかる」が育てるもの—ほめる教育に限界はないか 児童心理, 49, 15-21.
- Vukelich, C., & Kliman, D.S. 1985 Mature and teenage mothers' infant growth expectations and use of child development information sources. *Family Relations*, 34, 189-196.
- Willemsen, M.E., & van de Vijver, J.R. 1997 Developmental Expectations of Dutch, Turkish-Dutch, and Zambian mothers: Towards an expectation of cross-cultural differences. *International Journal of Behavioral Development*, 21, 837-854.